

第 90 話<空中索道>の要約と参考資料

第 90 話<空中索道>の要約

土呂久と中野内の鉱山で採掘したスズ鉱石を東岸寺の選鉱場まで運んだのは、7.9 キロにわたる空中索道でした。電化と機械化の近代的鉱山の象徴。2 日に 1 度、高い鉄柱に登って滑車に油をさす仕事は、空中の軽業師のよう。油さしのまつわる面白い話は尽きません。

第 90 話<空中索道>の参考資料

90-1 架空索道（ロープウェイ）の建設

広辞苑

さくどう[索道] 架空した索条に搬器をつるして、人または物を運搬する設備。架線ともいい、鉱業・林業の運材施設としても利用。ロープウェイの法令上の呼び名。

本邦鉱業ノ趨勢 昭和 10 年

本年度ニ於テ新設又ハ増設セルモノ

[坑外運搬設備]

岩戸鉱山	架空索道	37.3KW	1 台	延長 2,821 米	鉱石運搬用	新設
	電動捲揚機	7.5KW	1 台	延長 300 米	坑木運搬用	新設
	架空索道	29.8KW	1 台	延長 5,120 米	鉱石運搬用	新設

* 東岸寺線が 2.8 キロ、中野内線が 5.1 キロと思われる。

工藤キクエさんの話（1977 年 6 月 6 日聴取）

勝喜さんのところ（「南」）にあった家が、「鉄索が通るけ危ない」というんでここ（「脇の谷」）に移された。移ったのは、昭和 11 年 6 月ごろ。その年の 9 月に子どもができたので憶えている。

佐藤実雄さんの話（1979 年 4 月 15 日聴取）

中野内から東岸寺まで索道がつながったとき、鉱山で大きな祝いがあった。所長が「驚くなかれ、この工事に 1 千万円かかった」と、大変な金を費やしたことを説明した。

90-2 索道による運搬

飯沼保さんの話（1979年4月12日聴取）

土呂久から選鉱場まで、だいたい直じゃったですが、距離が2キロ（*2.8キロ）くらいですね。片道28分かかった。土呂久から中野内までは40分。黒葛原を越した。土呂久鉱山のすぐ上（連絡所から約500m）に屈曲があった。中野内からきた鉱石は、連絡所で乗り換えができよった。

私は東岸寺線の油さしをしたが、土呂久から東岸寺まで鉄柱が20本あった。鉄柱にはシーフ（滑車）がついていて、鉄柱と鉄柱の間隔の狭いところはシーフが2個、広いところは4個、土呂久公民館の上のちょっとした山を越すところは20個くらいあった。

東岸寺線には搬器が50かかっている。25は鉱石入り、25は空。50馬力でワイヤが回りよるから、荷のかかったところはワイヤがさがっていた。鉄柱の間隔の遠いところでは、荷のかかった搬器は空の搬器よりも30m下を通りよる。4000m÷50=80mおきに搬器がかかっている。搬器の間をつめすぎると、鉄柱の低いところで地をずっていくことがある。苗代の上をずったこともある。

90-3 索道の油さし

米田嵩さんの話（1978年1月29日聴取）

索道の油さしという仕事があって、ワイヤののつとる滑車の油さしに、飯沼保が身が軽かったので高い高い鉄柱の上に登って、小便してみせたりしよった。小便は途中で霧になってしもうた。すっと通るバケットに、柱からポッと乗って、向こうの柱まで行って、また油さして、中野内までやって回りよった男が2人おるですよ。飯沼保と藤高林。えらいな身の軽いことやりよったですがな。

佐藤仁志さんの話（聴取日不明）

トビ同様じゃったから、ワイヤの上から上をサルのようにあっち行ったり、こっち行ったりしよったけの。バケット（搬器）に乗ってツーと行きよれば、向こうから来るバケットにパーッと行って、飛び移りよったけよ。地上100メートルのところ、下は見らんのやけ、上ばかり見とるから、地の上で、このへんからそのへんに飛ぶようなものよな。下が川で岩の上に60メートルもある鉄塔が立つとるとよな。やっぱり命がけやった。バケットに乗って鉄柱に飛び移って、油さしちゃあ、次のバケットが来たときに乗り移る。滑車が一つの鉄塔に4つずつついとる。これに油さす。

選鉱場から土呂久鉱山まで直でくる。ここはカーブになっていた。入れ替えの地点。ここに屈曲があった。この谷の上に60~70mの鉄柱があった。鉄柱に登って、上から小便ばったりしよった。

飯沼保さんの話（1979年4月12日聴取）

鉾山に出たのは、昭和9年の10月ごろじゃなかったかな。明かりの仕事（坑外）が1日に1円30銭だったとき、油さしは2人ぼしで1か月に70円くらいになった。油さしをしたのは、土呂久の佐藤まさひろ（戦死）、藤高林（土呂久？）、飯沼保。藤高が中野内線、飯沼が東岸寺線を担当した。このシーフの心棒に直径5センチ、高さ7,8センチの油をさす壺がついている。シーフが回転すると、壺からスタンスタンと油が出る。油が切れると、ヒューヒューとおらびよった。1日越しに、湯飲みいっぱいもいらんくらいの油をさす。背中に4升入りのトタンのタンクをかるうて、鉄柱から鉄柱まで下を歩いて行き、鉄柱を上がる時は、タンクを降ろして、「小出し」に油を入れ替えた。いっぺんいっぺん歩いて行っては、鉄柱にのぼってさす。鉄柱にシーフが4つついておれば、1メートル半の鉄板がある。片一方を50センチ四方の足場に寄せ、片一方をシーフが回りよる半分に寄せて、油をさす。荷の入った搬器が来ると、鉄柱はぐらぐら揺れる。50メートル先を来よるときに油をさす。東岸寺線には鉄柱が20本。1日越しで、今日させば明後日。あいている日は、鉾石を積み込む停車場で働いた。搬器を押す仕事。油さしは午前中でしまえるので、その日は時間前でも帰ることができた。油をさした帰りに、東岸寺から、空の搬器に乗った。搬器に乗り換えるのは危険じゃ。鉄柱と搬器の間は、1m半くらい離れておる。空の搬器にとび乗ると、横ぶれする。クリップが半分しかかんでないから危なくてできない。

中野内線には、途中から乗るところが1か所あった。いちばん高い山の上（黒葛原越し）を通るとき、地すれすれ（30センチ）を行くところが10mほどあった。中野内線の油さしは昼前には終わらん。距離が直で4キロ。椿原のところは、下の谷から100メートルも高い。鉄柱から鉄柱まで1キロもある。この谷を降りて登って、歩いて行った。

鉄柱には30センチのはしごがあって、これで登る。「お前らは高いとこ登って、おずないか」と言われたが、明かりの仕事で人から使われるよりはええですわ。高いとこ登って身が震えたり、目の回る者は仕事でけん。今でん自分な、高いとこならどんどん登るですわ。

鉾山に出たあと、昭和12年に召集、支那事変で2年半行って、また戻って油さし。その間、鉾山から月9円ずつ渡りよった。昭和19年に大東亜戦争に引っ張られていった。20年に戻ったとき、鉄柱なんかみな影も形もねえごつしてあった。戦争に使ったのか？

甲斐ひさはるという男が、土呂久から中野内に行ったとき、空搬器の中で、寒いもんじゃき、炭の火をおこして乗った。火がごんごんごおこる。金は焼ける。下の穴から椿原谷（100メートル下）が見える。火を落とすと山火事になるし、飛び降りるこたでけんし。

「小便で消せばよかったが」と言うと、「小便もでらんかった」と言うた。

90-4 51メートル鉄柱

飯沼保さんの話（1979年4月12日聴取）

いちばん高い鉄柱は51メートルあった。(場所は、大切坑と窯につづく橋の間) 岩の上に立ちよったから、下の川まで100メートルくらいになった。鉄柱の地元が狭いので、下から30~40mまでは箱づくりにして、あとが尖っていた。上から見ると、下で作業している者が三つ子のように小さかった。事務所の連中が、みんなで賭けをして、鉄柱の上まであがったら5円の金をやる。都城出身の馬場まさとしが1人だけあがった。他の者は5m、10mあがったら、足が震えてダメ。

箱の中に階段がつくってあって、下から30~40mは垂直にのぼるようになる。藤高林が、この鉄柱に登って小便ばったら、川風に吹かれて下までつかざった。

90-3 搬器の落下

佐藤富喜夫さんの話(1979年4月19日聴取)

火事の時、芳松さんとこ倉庫の屋根をザーとワイヤがずりかかった。落てたワイヤが菊男さん方上の崖(だき)にかかった。

下から手を振ると、箱(搬器)の中から人が「おい、おい」言うて見よらした。

佐藤芳松さんの話(1979年4月19日聴取)

火事の時、搬器が落ちた。そのあと、搬器を駄の水入れに使うたが、10年くらい前に腐ったので捨てた。搬器はクリップでロープの上にかかっているだけだから、はずれると、落てることがよくあった。たるんだところで、ツーとずって、前に行く搬器にぶつかることもあった。

佐藤数夫、ミキさんの話(1977年12月10日聴取)

選鉱場が焼けたとき、土呂久と東岸寺の間の索道のワイヤが切れて、えらいな騒動をしたとよ。勝喜さんとこの物置の上をずりあげてよ、鉄の搬器があちこちで落ちた。みんな搬器を拾うて、馬の水ためにした。

索道を徹収するときに、大車輪があつて、それをこわすとき、向土呂久の家に落として、屋根を破って仏壇を壊した。

佐藤ツルさんの話(2021年1月7日聴取)

4歳か5歳のころ、私と妹が家にいたときに、大輪(だいわ)が屋根と壁を破って神棚の上に落ちて来た。家が倒れることはなかった。山に出ていた親は、2人が死んだのではないかと思って戻ってきた。赤ん坊だった妹は、すすで真っ黒くなっていた。落ちてきたのは、直径が4メートルもあるような大きな輪で、ワイヤを引き回すのに使っていたと聞いた。索道を倒すので、大輪を4つに分解して降ろすときに失敗したということだった。